

マタイ、ルカ両福音書におけるマルコ14：51-52の 共通削除について

溝田 悟 士

はじめに

正典に含まれたマタイ、マルコ、ルカの共観福音書には、イエスの逮捕の場面が描かれている。イスカリオテのユダの手引きによってユダヤ人たちがイエスを捕らえに来るとともに、イエスを見捨てた弟子たちが逃げ出し、イエスが連行されていくという、まさに迫真の場面である。

しかし、マルコ福音書には、弟子たちの逃亡の直後に、次のような不思議な箇所が存在している。

一人の若者 νεανίσκος が、素肌に亜麻布をまもってイエスについて来ていた。人々が捕らえようとすると、亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。(マルコ14:51-52)¹⁾

この箇所は、他の共観福音書には対応した箇所がなく、マルコ福音書にだけ存在する箇所であるため、多くの議論を呼んできた。なぜ、マルコ福音書だけに存在し、対応する箇所が他の福音書に存在しないのか。物語の進行を突然断ち切って出現するように見えるこの「若者」は何者なのか。

この問題は、共観福音書の中で最初に書かれたのがマルコ福音書であり、それを下敷きにマタイ、ルカ両福音書が成立したという、現在の学界でもっとも広く受け入れられている「マルコ優先説 Markan priority」という仮説に立つとさらに複雑になる²⁾。この仮説に立つならば、マルコ福音書に特有のこの箇所は、後に成立したマタイ、ルカ両福音書の著者たちが削除したと理解せざるを得ないが、マルコ福音書より後に生じた他の福音書がこの「逃亡する若者」を共通して削除した理由は何か。

本稿では、学界で広く受け入れられているこのマルコ優先説を議論の前提として、逃亡する若者と「復活信仰」との間に関連があるという可能性を基に、マタイ、ルカ両福音書において共通して逃亡する若者の削除が起こった原因について新しい仮説を提案することを目的とする。この問題の考察は従って、キリスト教の初期における教義の核心である復活信仰の発展経過の解明に貢献するものである。

I マルコ14:51-52をめぐる議論の現状

1.1 普及している解決策

この逃亡する若者の箇所について、現在一般に広く普及している説明には二つの系譜がある。ひとつは、マルコ福音書の筆者マルコ自身がその実体験を書きこんだ匿名の署名である、とする説明である。この種の説明を展開する典型的な学者として William Barclay が挙げられる。まず Barclay は、使徒言行録12:12の記述を出発点にして議論を展開する。

こうわかるとペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには、大勢の人が集まって祈っていた。(使徒言行録12:12)

Barclay はこの箇所に基づき、「エルサレム教会の集会所、または本拠は明らかにヨハネ・マルコの母マリヤの家であった」と考え、「もし、そうであるならば、最後の晩餐のとられた二階座敷は同じ部屋、マルコの母の部屋であったことは少なくともあり得る」という推測を根拠として、「教会の中心になるために、その部屋より蓋然性の強い場所はない」と主張する。この若者は少年を意味しており寝ていなければならない時間にもかかわらず「最後の晩餐」の時には起きていて、「裸の身体を亜麻布をまとったままで」イエスの後をつけたか、イエスと弟子たちが去った後に来た警吏たちの騒音で目を覚まし、イエスに急を知らせるために裸に敷布をまとい後を追った、と主張する。つまり逃亡する若者はイエスの逮捕を実際に体験した「マルコ自身であり、彼は自分の名前を全然用いずして、『わたしはそこにいた』と表現した」と主張している³⁾。しかし、このような逃亡する若者をマルコ福音書の「著者自身」とみなすという普及した説は、批判的な陣営からは疑問とされている。この陣営の代表として Bennett Harvie Branscomb が挙げられる。彼は、最後の晩餐がなされた家が使徒言行録12:12における家であったと考え得る根拠が全くないなど、マルコ福音書の著者自身であるというのは完全に憶測に過ぎない、と主張しており、若者自身が居合わせる理由や、その衣類の状態について、その後にはいかなる詳細な記述もないことから、この若者が著者マルコであることを否定する。また、この若者が逮捕劇の目撃証人で語り手であるとは推測しているものの、「そしてある若い男が従ってきた」とあるのが、直前の50節におけるイエスの弟子達が全て逃げ去ったと言明されているということと食い違うことから、今は失われた資料に基づいて付加したものだとも考えている⁴⁾。

Barclay に代表される著者マルコ説に反対する Branscomb の論拠は確かなものである。ヨハネ・マルコの母の家に関する使徒言行録12:12の記述は、その家に大勢が集まって祈っていたことのみを示すだけであり、その家が最後の晩餐の行われた家であるとする根拠となり得な

い。またその家が、草創期のキリスト教の本拠だとする推定は、二重の推定による不確かなものである。また、マルコ優先説を議論の前提としておきながら、マルコ福音書成立以降の文書の記述から、マルコ福音書の内容の根拠を逆算する方策そのものが説得力を欠いている。一方で、Branscombに代表される「批判的」とみなされてきた解決にも決定的な疑問が残る。つまり、この「逃亡する若者」を安易に付加としてみなすべきなのか、また若者とその衣類に関する記述はマルコ福音書には他に存在しないのか、という疑問である。

1.2 現在までの議論の経緯

マルコ優先説に従ってマルコ福音書以降の文書に根拠を求めず、これらの疑問点に答えようとするれば、マルコ福音書の内部に逃亡した「若者」を意味する *νεανίσκος* という語が存在する箇所との関連が問題となる。この *νεανίσκος* という語は、マルコ福音書内部では他には「空の墓物語」(16:1-8) にしか存在しない。現在は、空の墓物語が、マルコ福音書の文書としての結末部分だと考えられている。

1 安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。2 そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。3 彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。4 ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。5 墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者 *νεανίσκος* が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。6 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。7 さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」8 婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。(マルコ16:1-8)

この「逃亡する若者」と「空の墓の若者」との関連の可能性については、現在までたびたびとりあげられてきた。Frans Neirynckによるこの問題を扱った詳細な論文によると、この可能性を最初に指摘したのは、K. Knoxの1951年の論文が最初ということである⁵⁾。Knoxは、埋葬前のイエスの遺体に巻かれたのも若者が捨てたのと同じ「亜麻布」であることから(マルコ14:56)、若者が「亜麻布」を残して逃げたのと同じように、イエスも同じように亜麻布を残して敵の手から逃げた、と読むことを読者の判断にゆだねている、と主張している。その上で、マルコ福音書の逃亡する若者と空の墓の若者の間の関係の可能性を指摘している⁶⁾。その後Knoxによる仮説を継承したRobin ScroggsとKent I. Groff(1973)は、この二人の若者をキリスト教への新入会員であり同一人物であるとした。つまり、14:51-52での裸の状態での逃亡は

キリストと共に死ぬことを意味しており、古代の教会において実際に洗礼志願者が水に沈められる前に脱衣し、水から上がった後で白い衣に着せ替えられるという儀礼が存在したと想定し、それがマルコ福音書の記述に影響していると主張した⁷⁾。これについては、Michel Gourgues が適切に批判しているように、マルコ福音書成立より前にそのような儀礼が成立していた可能性を証明することは出来ない⁸⁾。それ以来、現在に至るまで、この同一視の議論は多様な展開を持って繰り返されているものの、肝心のマタイ、ルカ両福音書でそろって逃亡する若者が削除されるようになったかという問題について解決策を提示できてはおらず、同一視に関する学界での評価も低くなりがちである⁹⁾。

II 「逃亡する若者」と「空の墓の若者」を結ぶ結束性

2.1 分析のためのモデル化

従って、この二箇所「若者」の同一視と現在までの議論における論点を再度整理し、物語構図を分析することで、マタイ、ルカ両福音書での同時削除との関連の可否の検討への足がかりとしよう。

ここまでで紹介した議論でわかるとおり、マルコ福音書の逃亡する若者と空の墓の若者という二つの場面に出現する「若者」や「亜麻布」という語彙の関連性の有無が問題の焦点である。Halliday と Hasan は、テキストをテキストとして定義する意味の諸関係を「結束性」と呼び、「文法的結束性 grammatical cohesion」と「語彙的結束性 lexical cohesion」があるとしており¹⁰⁾、このうちの語彙的結束性、特に結束性を示すために一般名詞を用いるという「再叙 reiteration」という手法が用いられる、という¹¹⁾。つまり、我々がこの二つの該当箇所において問題としているのは、この再叙によって、逃亡する若者の箇所から、空の墓物語にいたるまでの部分が各語彙と各文がつながりを持つ「テキスト性 texture」を持った統一体としての「テキスト」となっているか、ということなのである。

そこで、逃亡する若者の箇所がイエスの逮捕から福音書の結末までの流れが、テキスト性という統一性を持って存在しているかどうかを確認するため、物語の概略を箇条書きで抄録してみよう。

イエスが人々に捕らえられる。(14:43-49)

弟子たちが皆、イエスを見捨てて逃げる。(14:50)

◎ある若者 νεανίσκος が、着て περιβάλλω いる亜麻布 σινδώνを捨てて逃げる。(14:51-52)

イエスが死刑の判決を受け、十字架につけられる。(15:6-32)

イエスが息を引き取る。(15:33-41)

イエスが亜麻布 σινδώνで巻かれ、墓に納められる。(15:42-47)

安息日が終わり、婦人たちが墓に行く。(16:1-2)

◎若者 νεανίσκος が墓の中で白い長い衣を着て περιβάλλω 右側に座っている。(16:5)

その若者がイエスの復活を宣言する。(16:6)

婦人たちが墓を出て逃げ去る。(16:8)

重要なことは、「逃亡する若者」(14:51-52)の箇所に含まれる「若者 νεανίσκος」「亜麻布 σινδών」「着る περιβάλλω」という三つの語彙が、マルコ福音書では上述した箇所にしか出てこないことにより、「逃亡する若者」と「イエスの埋葬」さらに「空の墓物語」の三つの場面が語彙的結束性を持って物語テキストを形成しているということである。つまり、物語の進行は次のようにモデル化できる。

- a. (&) 若者が亜麻布を着ている。(14:51)
- b. (&) 若者が亜麻布を捨てて、逃げる。(14:52)
- c. (&) イエスの遺体が亜麻布で包まれる。(15:42-47)
- d. (&) 若者が白い長い衣を着ている。(16:5)

なお(&)は問題の文が「あいまい」であることを示している¹²⁾。まず「a」と「b」は、文字通りの意味にとることもできるが、その後の「c」から「文脈的比喩」¹³⁾ととることも可能である。「a」と「b」のどちらのテキストもともに「選択制限」の違反¹⁴⁾はなく、これのみでは文脈比喩の可否を決定しかねる。しかし、「c」に至って「亜麻布」の用途が理解されることになり、文脈的比喩が成立していることが明瞭になる。

すなわち、この「亜麻布」は、15:46で使われている死者が身にまとう「死に装束」と同じ用途を想定するのが妥当ということであろう¹⁵⁾。従って、「亜麻布」に「死に装束」を代入して、次のように理解される。

- a. 若者 νεανίσκος が 死に装束(x) を 着ている περιβάλλω。
- b. 若者 νεανίσκος が 死に装束(x) を 捨てて、逃げる。
- c. イエスの遺体 が 死に装束(x) で 包まれる。
- d. (&) 若者 νεανίσκος が 白い長い衣(y) を 着ている περιβάλλω。

この時点で、「a」の「若者 νεανίσκος」という主語と「着る περιβάλλω」という動詞が、問題の「d」と同じであることから、その意味は現時点では不分明ながら、射程を「d」にまで及ぼす文脈比喩を構成するテキストの可能性を指摘できる。つまり、「a」と「d」の両方の若者が同一人物であり、その衣服が違うのは彼が「着替えた」ためである、と理解できるのである。従って、この若者はイエス逮捕時に恐怖からイエスを見捨てたと共に、自身の身に帯びていた「亜麻布」つまり比喩的に表現された自分自身の「死」を捨てたことでイエスの遺体に亜

麻布が巻かれ、結果としてイエスに代理で「死」を着てもらった、と理解ができる。つまり、マルコ福音書では、イエスがこの若者で表された弟子の「身代わり」となって「死」に、その若者は死と全く異なる意味を持つ新たな衣類を着て墓の中で再び出現している、と理解される。

2.2 結束性に基づく同一視に対する反対論の検討

なお、上記のような読みを取る決断は、Umberto Eco の言葉を借りれば「推考散策」の選択肢の一つであると言える。推考散策とは、「もしファープラが『x はしかじかの行動を行う』と告げるとすれば、読者はあえて『x がしかじかの行動を行うたびに、通常、y という結果を生じるのだから』と考え進み、『だとすると x の行動は結果 y を生じさせるだろう』と結論付ける」ことであり、緊張、賭け、仮説的推論という特徴を持っている¹⁶⁾。この考えに従って、この同一視という選択肢を否定することを試みようとする、他の可能性も検討してみる必要があるだろう。

中でも Adela Yarbro Collins による冠詞の有無に関する議論には、注目すべきである。Collins は、もしマルコ福音書の著者が16:5の若者を14:51-52の若者と同一人物だと意図したのであれば、16:5で *ὁ νεανίσκος のように定冠詞を使っただろうと、同一視を疑問視する¹⁷⁾。

この反論は、二人の若者が同一人物であることを直接否定しようとすることを目的として、16:5の νεανίσκος 周辺の語彙を問題にした点では評価できるものの、重大な欠陥を抱えている。つまり、「限定詞」としての定冠詞の有無は、反証としては全く役に立たないということである。登場人物が再登場するような物語テキストの場合、再登場時に逆行照応の「定」の指示をなくすことで、登場人物の同一性を隠した上で、後に読者に発見させようとするテキストは存在する。例えば、小泉八雲の『雪女』の英語原文では、雪女が最初に老人の命を奪ったときは a woman と「不定」で登場し、年月が経って姿を変えて主人公の前に再登場する時にも a girl と「不定」で表現されている。後に、主人公と結婚したその「a girl」は、老人の命を奪った時のことを秘密にしないと命を奪うという禁則を主人公が破ったことを契機として、老人の命を奪ったあの「a woman」と同一人物であることを表明する¹⁸⁾。従って、マルコ福音書の若者においても、同一人物の劇的な再登場を演出する文学技法としてあえて定冠詞の使用を避ける、という選択肢を取る積極的な理由があるといえる。さらに、限定詞の有無という周辺語彙を論じるなら、14:51-52の「若者」とは別人であることを示す明確な反証となるギリシャ語の語彙 ἕτερος (「ほかの」ルカ20:11参照) や ἄλλος (「他の」第一コリント9:27参照) などの否定を表す語が、この16:5の νεανίσκος の周辺には存在していないことも、等しく考慮に入れていないので公平さを欠いている。また、先にあげた Halliday と Hasan の言うように、結束性は、文法的結束性に含まれる定冠詞によって生じるだけでなく¹⁹⁾、すでに触れたように語彙の「再

叙」によっても生じるといふ点にも注意すべきである。

先述の Eco は、「推考散策」の中では、「読者による予想的選択がみな、確率論＝蓋然論的に同じ価値を持つわけではない」と言い、読者は「さまざまな仮説を立てることができる」が、「ひとつの、それもただひとつのものだけが、よい仮説であるのは明らかだ」と主張している²⁰⁾。従って、この二箇所に出現する若者については、同一視という選択肢を取るほうがマルコ福音書全体のテキストの整合性に貢献しており、それを否定する選択肢を取るよりも、確率論＝蓋然論的には高い価値を持つと思われる。

2.3 同一視によって明らかになる空の墓の「若者」の正体

この時点で、マルコ優先説を前提としたことを再確認しておくことは重要である。つまりマルコ優先説を認める以上は、他の福音書を根拠として空の墓物語の若者は「天使」であるから、逃亡する若者とは同一視できない、と安易に「逆算」をするような反論を立てることは許されない。マルコ福音書が若者を「天使」だと理解している根拠は、全く存在しないのである²¹⁾。従って、この空の墓物語の若者が人間であるとすれば、その身元は逃亡する若者と同一人物であるとする選択肢を採ることでしか判明しない。それはイエスの「弟子」の一人であると解すべきである。Stephen B. Hatton は、14:51-52で若者がイエスに「ついてきて」いたことを表す動詞 συνακολουθέω (従う) に注目し、その若者をイエスの追隨者として描くことによって、マルコ福音書が彼を「弟子」として記号論的に指摘している、と主張する。さらに Hatton は正當にも、「従うこと following」は「弟子たる資格 discipleship」のイメージを明らかに喚起するとも主張している¹²⁾。もし、逃亡する若者が「弟子」の一人であるならば、それと同一人物である空の墓物語の若者も当然、弟子であると読むのが順当である。

ここで、若者が着ていた「白い長い衣」という服装の色を表す形容詞 λευκός (白い) が、この空の墓の場面以外では、「イエスの変容」の場面 (マルコ9:2-13) にしか出てこないことには、注目しなければならない。そこでは、形容詞のみならず、派生元の動詞形 λευκαίνω (白くなる) も使われている。

六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白 λευκός に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった λευκαίνω。(マルコ9:2-3)

多くの学者はこの場面は、イエスの地上での生涯の中に「復活物語」を反映して読まれていた、と説明している²³⁾。例えば、Rudolf Bultmann はこのイエスの変容に関して第二ペテロ書の著者が行っている解釈を正當な理解だと考え、「II ペテロの著者は、まだこの物語を復活

物語として知っていた。というのは、1:17の λαβῶν ……τιμὴν καὶ δόξαν [彼が …… 榮譽と栄光を受けたその時] は、復活ないし高擧にのみ関連しうるからである」と述べ、さらに「マルコ9-10節の付加にも、この物語が復活物語であった残響がある」と主張するが²⁴⁾、これは妥当である。Bultmann が復活物語の残響であると指摘したイエスの変容に後続するマルコ9:9-10では、

一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことを誰にも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。(マルコ9:9-10)

とあり、空の墓物語との関連を明確に指示している。従って、マルコ福音書の空の墓のテキストは、「イエスの変容」の場面を連想させ、そうすることで白い衣に「復活」の意味を見出し、白い衣服を着た人物を復活した状態だとみなすよう、要求しているのである²⁵⁾。

つまり、マルコ福音書の空の墓の若者が天使ではなく人間だとすると、復活を暗示する「白」衣を着ている空の墓の若者は弟子の一人であり、それもマルコ福音書執筆当時は既に死んでいたが、実際には将来の復活が期待されているためテキストの上では復活をしているのだ、と理解できる。さらに、婦人たちは遺体の消失が起こった後に墓にやって来たのだから、若者の「あの方は復活なさった(16:6)との発言が根拠となり、その若者こそイエス復活の最初目撃証人だと推定できる²⁶⁾。

Ⅲ マタイ、ルカ両福音書における共通削除の要因

3.1 「サドカイ派との復活論争」に基づく共観福音書共通の復活信仰の前提

このようなマルコ福音書内部の「若者」の同一視の理解によって、逃亡する若者の箇所が空の墓物語の理解にも密接な関連を持っていることが明らかとなり、さらに空の墓で若者が着ていた衣の色である「白」が、復活を暗示したものであるという可能性が高くなった。

ここで注目すべきは、「サドカイ派との復活論争」(マルコ12:18-27)である。サドカイ派は死者の復活はないと主張しており、七人の男と結婚した女が死んで復活した時には、七人のうち誰と結婚するのかというイエスに質問をし、イエスがそれに次のように答えている。この箇所は共観福音書に共通して存在しているので、列挙してみよう。

死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。(マルコ12:25)

復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。(マタイ22:30)

イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちはもはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかるものとして、神の子だからである。」(ルカ20:34-36)

つまり、共観福音書は「復活した人間は天使に似た存在である」という共通した理解を持っているのである。ここで注目したいのが、Neil Q. Hamilton の見解である。彼は、マルコ福音書における「逃亡する若者」と「空の墓の若者」を同一人物であると認めた上で、マルコ福音書の「空の墓物語」は著者による創作であり、その創作の動機はマルコ福音書の中にある「サドカイ派との復活論争」における復活理解に存在する、と主張する²⁷⁾ この Hamilton の主張について、創作か否かは留保するが、マルコ福音書においては「復活した人間は天使に似た存在である」という復活理解が、若者の同一視に基づく空の墓物語の理解の前提となっているという点については同意できる。また、彼の主張はマルコ福音書のみには適用されるべきではなく、共観福音書全体において理解されて始めて意味を持つと思われる。なぜならば、サドカイ派との復活論争による「復活した人間は天使に似た存在である」という理解は、マルコ福音書の空の墓物語の理解の前提となるだけでなく、マタイ、ルカ両福音書の著者たちがマルコ福音書における逃亡する若者と空の墓物語の若者の関係性をどう解釈し、どんな理由で逃亡する若者の箇所を削除したのかを探究する上でも前提となるからである。

マルコ優先説に基づくならば、マタイ、ルカ両福音書の著者たちは、マルコ福音書の空の墓物語のテキストが要請する復活理解を真実なものとして自分たちの福音書に取り入れそれを編集し直し、さらに分かりやすく洗練された表現とするためという積極的理由で逃亡する若者の箇所を削除したと考えられる。従って、その削除の積極的な理由の手がかりは、マタイ、ルカ両福音書の著者がマルコ福音書の空の墓物語に加えた編集を元にすれば得られると思われる。

そこで、それぞれの福音書について、編集の痕跡を問うことで削除の理由を具体的に考察する。

3.2 マタイ福音書の「空の墓物語」の編集に基づく削除の手がかり

マタイ福音書において重要な鍵となるのは、その著者が、マルコ福音書の「空の墓物語」の「若者」を、「主の天使」(28:2) に改変していることである。

さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震 σεισμός が起こった。主の天使 ἄγγελος κυρίου が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。(マタイ28:1-3)

Ulrich Luz は、マタイ福音書の「空の墓物語」は、それ以前の「聖徒の復活」(27:51-53)の記事と互いに関連性を持っていると主張する。

しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり σειω, 岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そしてイエスの復活の後、墓から出てきて、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。(マタイ27:50-53)

Luz によれば、「聖徒の復活」も、「空の墓物語」における「天使」の登場も、ともに「地震」が伴っている (σειω: shake; 27:51/ σεισμός: shaking, earthquake; 28:2) ことから、天使の出現の「地震」によって、読者は「聖徒の復活」の「地震」を思い起こす、というのである²⁸⁾。この Luz の指摘は、注目すべきである。Luz の主張は、マタイ福音書において、聖徒の復活の場面と空の墓物語の間に「語彙的結束性」の「再叙」(II. 1. を参照) が存在している、ということだからである。

ここで重要なことは、この聖徒の復活の記事がマタイ福音書にしか存在しない、ということである。つまりマタイ福音書の著者が、マルコ福音書に独自の記事を付加したことになる。その付加の動機こそ、マタイ福音書で逃亡する若者の記事が削除された原因である。付加の動機は、付加の箇所がイエスが十字架で息を引き取った直後であることからわかる。荒井献は、このマタイ福音書の聖徒の復活の付加の意図について、「マタイによると、イエスの死と共に、終末時に待望されている死人の復活が既に実現しつつある」という、大変重要で興味深い指摘をしている²⁹⁾。つまり、マタイ福音書のテキストでは、「死人の復活」は、十字架でのイエスの死の瞬間と同じであると読むことが要請されているのである。従って付加の動機は、死んだ弟子の復活はテキストの上でいつ起こったのか、を明らかにすることであった。

既に検討したとおり、マルコ福音書のテキストでは、亜麻布は死の意味を持ち、それを捨てて逃亡した若者の「身代わり」となって、イエスが「死」んだと理解された (II. 1. を参照)。またこれも既に検討したとおり、逃亡する若者も空の墓の若者も同一人物であり、その若者は死とは異なる復活を遂げたことを表す白い衣を着て墓の中で再び出現している、と理解され、その若者こそイエス復活の最初の見証人で、復活を期待された弟子の一人であるということであった (II. 3. を参照)。そうだとすると、亜麻布という死から逃れた若者が復活する時点は、イエスの死によって身代わりが完成するまさにその死の瞬間が物語上、最も適していることになる。従って、マタイ福音書の著者は、死人の復活がイエスの身代わりの死によって起こることを明確にするために、神殿の垂れ幕が裂けたイエスの臨終の瞬間に死人の復活は起こっていると理解し、その直後に「聖徒の復活」を新たに付加したと考えられる。

マタイ福音書の著者がイエスの死の瞬間に「聖徒の復活」を付加したことで、「空の墓物語」におけるイエスの復活を告げる登場人物にイエスの復活の証人としての役割を負わせる必然性もなければ、同時にこの登場人物が弟子である必然性もなくなる。そこでマタイ福音書の著者にとっては、マルコ福音書で復活することを期待されていた既に死んだ弟子の代わりに人物が必要となる。マタイ福音書の著者は、若者を天使とするヒントを「復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使 ἄγγελος のようになるのだ (マタイ22:30)」という復活の定義から得たのだと考えられる。

つまり、マタイ福音書の著者は、マルコ福音書の二人の若者の同一視を読み取り、マルコ福音書の復活理解を継承した。そして、復活する人々の死の身代わりとしてイエスの死があった、という継承した復活理解をさらにわかりやすいものにするために、聖徒の復活の記事がイエスの死の瞬間の直後に付加した。さらに、マルコ福音書の二人の若者の同一視をもたらず語の結束性を継承する必要がないばかりか、安易に継承して誤解を避けるために、空の墓の「若者」という語を「天使」へと変更した。従って、さらに誤解を与えかねないマルコ福音書における若者という語の結束性の残滓を継承すべきではないという積極的な理由で、マタイ福音書の著者は逃亡する若者の記事も削除したと推定される。

3.3 ルカ福音書の「空の墓物語」の編集に基づく削除の手がかり

ルカ福音書において、マルコ福音書の逃亡する若者の箇所が削除された理由を追及する上で、最も重要な鍵となるのは、「空の墓物語」(24:1-12)において復活を告げる登場人物が、「若者」から「二人の人 ἄνδρες δύο」に変更されていることである。

そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。見ると、石が墓のわきに転がしてあり、中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人 andrej duo がそばに現れた。(ルカ24:1-4)

Bultman は、この人数の変更を、「むしろここには、おそらく具象性ないしは対象性への欲求に基づく、あくまで通俗的な物語手法のモチーフが存する。たとえば主人公、祭壇、門などの左右に脇役の立っているのを見かける。舞台上の群像の・・・対極二分化を考えればよい」とし、数多くの民謡に普遍的に用いられる表象の叙述方法にその原因を求めている³⁰⁾。しかし、これは安易な解決法である。

このひとりの「若者」を「二人の人」に人数ごとに変更した理由は、ルカ福音書の「空の墓物語」の直後に続いている「エマオ物語」(24:13-35)の登場人物の人数から理解できる。エマオ物語は旅する二人の弟子に同伴してきた人物が、復活したイエスだったとは分からなかった、

という内容である。

ちょうどこの日、二人の弟子 δύο ἐξ αὐτῶν [two of them] が、³¹⁾エルサレムから六十スタディオ
ン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話
し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人
の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。(ルカ24:13-16)

ここで重要なことは、このエマオ物語の記事はルカ福音書にしか存在しない、ということ
である。つまりルカ福音書の筆者が、独自の記事を付加したことになる。その付加の動機の解明
こそ、ルカ福音書で逃亡する若者の記事が削除された原因の解明につながる。この付加の動機
はエマオ物語での登場人物の「発言」からわかる。この二人の弟子は、旅に同行している相手
が復活したイエスだと気がつかぬままに、イエスの十字架での死と墓が空になったのを発見し
た婦人たちの目撃談をイエスに教える。

「しかも、そのこと [=イエスの十字架死]があつてから、もう今日で三日目になります。ところ
が、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見
つけずに戻って来ました。そして、天使たち ἄγγελοι が現れ、「イエスは生きておられる」と告
げたと言うのです。」(ルカ24:22-23)

ここで重要なことは、同じルカ福音書の著者が、イエスの復活を告げる登場人物を表現する
のに、場面ごとに二つの語を、慎重に使い分けていることである。ルカ福音書の「空の墓物語」
では、イエスの復活を告げたのは「二人の人 ἄνδρες δύο」(24:45)だとされており、著者は明
確に人間だと考えている。一方でそれに引き続く「エマオ物語」においては、同じイエスの復
活を告げた登場人物は「天使たち ἄγγελοι」とされており、人間である婦人たちの目撃談とし
ての表現なのである。つまり、ルカ福音書の筆者自身は、復活を告げる人物を「人間」だと認
知しているが、人間である婦人たちの目から見た場合「天使」に見えた、ということなのであ
る。この二つの使い分けを読むとき、エマオ物語のテキストは、「人間の目から天使に見える
者はどんな人物か」と再確認することを読者に求めているのである。つまりルカ福音書のテク
ストは、サドカイ派の復活論争での前提から、空の墓におけるの二人の人 ἄνδρες δύο を、「復
活するのにふさわしいとされた人々」だと理解することを読者に求めているのである。

マルコ優先説に立ち戻ると、ルカ福音書の筆者が、(1) マルコ福音書のテキストに、ある場
面と別の場面を同じ語彙の「再叙」(II. 1. を参照)でつなぎ、読者に場面を関連させて読み解
かせるという文学技法の存在を認識したかどうか、さらには(2) マルコ福音書のテキストが
要請するとおりに逃亡する若者と空の墓の若者の関連性を読み解いた結果、得られた復活思想

を継承したかどうか、が問題となる。

ルカ福音書の内部において、この二つの条件が満たされる場面が重要であるが、その条件を満たすのは、まさにこのエマオ物語しかない。確かに今問題にしている「空の墓物語」の二人の人 *ἄνδρες δύο* と、「エマオ物語」の二人の弟子（＝彼らのうちの二人 *δύο ἐξ αὐτῶν*）の間は、*δύο* (two) の「再叙」で結束されており、ルカ福音書のテキストは「二人の人」と「二人の弟子」が関連性を持っているという理解を読者に求めている。つまり、この結束性が両者の同一視を求めているのなら、先に論じたサドカイ派との復活論争での前提から、この空の墓の「二人の人」は、執筆当時は既に死んでいるが「復活するのにふさわしい」とされた「二人の弟子」であり、イエスの復活の目撃証人でもあると理解できる。これについては、エマオ物語そのものが、復活したイエスが二人の弟子の前に現れ、後にイエスがパンを裂き二人に渡した瞬間に「二人の目が開け、イエスだと分かったが、姿は見えなくなった」(24:31) という物語であり、二人の弟子が復活したイエスの目撃証人であることを明確に語っているということが根拠となる。また、マルコ福音書において空の墓の「若者」として表され、既に死んだが将来の復活が期待される弟子がテキスト上ではイエスの復活の目撃証人だった (II. 3. を参照) という発想を継承していると理解できる。

つまり、ルカ福音書の著者は、マルコ福音書の二人の若者の同一視を読み取り、マルコ福音書の復活理解を継承した。そして、死んでいるが復活が期待される二人の弟子をイエス復活の目撃者としてエマオ物語に新しく登場させた。同時に、同一視を促す空の墓のイエス復活を告げる人物を若者から二人の人へと変更した。従って、もはや誤解を与えかねないマルコ福音書における若者という語の結束性の残滓を継承すべきではないという積極的な理由で、ルカ福音書の著者は、逃亡する若者の記事も削除したのだと推定される。

まとめ

そもそも最初に書かれたマルコ福音書の読者に要求されていたことは、若者として表現されたイエスのある一人の弟子が、死に装束である亜麻布によって比喩的に表現された死をイエスが引き受けたことで、空の墓に出現し白い衣を着て永遠の命を受けているという文脈比喩を理解することであった。さらに、「復活した人間は天使に似たものとなる」という思想がマルコ福音書に含まれており、この双方が後続のマタイ、ルカ両福音書における編集に影響した。

マタイ福音書では、聖徒の復活の箇所をイエスの臨終の直後に拡大することで、弟子を含めた人々の復活は、既にイエスの死の瞬間からイエスの死と引き換えに始まっている、と読者が理解するように促されている。また、ルカ福音書では、空の墓の二人の人と、エマオ物語の二人の弟子との同一視が読者に対して促されている。エマオ物語では登場人物の二人の人が「天

使に似たもの」であることを示すことで復活したことが示唆されている。

つまり、マタイ、ルカ両福音書のいずれにおいても、マルコ福音書における逃亡する若者と空の墓の若者との関連性によって理解される復活信仰を受け継いだが、それぞれの独自の記事が付加され空の墓物語が編集されるなど、復活信仰の記述体系が異なって来たために、逃亡する若者の記事を残しておく必要性もなくなり、かえって残すことで誤解を生じる可能性も生じた。そのために、マタイ、ルカ両方の福音書において積極的に削除されたと考えられる。

注

- 1) 聖書の引用は、共同訳聖書実行委員会「聖書 新共同訳」、日本聖書協会、1995によった。またギリシャ語原文は、Kurt Aland et al. eds., *Neatle-Aland: Novum Testamentum Graece*. 27th ed. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1993を参照した。
- 2) マルコ優先説は、マタイ、ルカ両福音書がマルコ福音書と共に他の仮説上の文書Qの二つを基に成立したという「二源泉説」の基礎である。マルコ優先説の発展の経緯はアルベルト・シュヴァイツァー【イエス伝研究史(上)】シュヴァイツァー著作集第17巻、遠藤彰、森田雄三郎共訳、白水社、239-264頁。また、二源泉説の問題に関しては、木幡藤子、青野太潮編【聖書学の方法と問題】現代聖書講座第2巻、日本基督教団出版局、1996年、276-322頁。
- 3) ウィリアム・パークレー【聖書註解シリーズ3 マルコ福音書】大島良雄訳、ヨルダン社、1968年、417-19頁。
- 4) Bennett Harvie Branscomb, *The Gospel of Mark* (The Moffatt New Testament Commentary; New York and London: Harper and Brothers, n.d.) 268-71.
- 5) Frans Neiryneck, "La Fuite du Jeune Homme en Mc 14, 51-52," *Ephemerides Theologicae Lovanienses* 55 (1979): 43-66.
- 6) John Knox, "A Note on Mark 14:51-52," *The Joy of Study* (New York: MacMillan, 1951) 27-30.
- 7) Robbin Scroggs and Kent I. Groff "Baptism in Mark: Dying and Rising With Christ," *Journal of Biblical Literature* 92-4 (1973): 531-48.
- 8) Michel Gourgues, "A Propos du Symbolisme Christologique et Baptismal de Marc 16.5," *New Testament Studies* 27(1981): 675.
- 9) Howard M. Jackson, "Why the Youth Shed His Cloak and Fled Naked: The Meaning and Purpose of Mark," *Journal of Biblical Literature* 116/2(1997): 273. n1. に至っては、この同時削除の問題をマルコ福音書の分析から話を脱線させると考え、議論を避けてすらいる。
- 10) M. A. K. ハリデイ、ルカイヤ・ハサン【テキストはどのように構成されるか：言語の結束性】言語学翻訳叢書第8巻、安藤貞雄他訳、ひつじ書房、1997年、1-37頁。
- 11) ハリデイ、ハサン、360-84頁。
- 12) 山梨正明【コレクション認知科学5：比喩と理解】東京大学出版会、2007年、16頁。
- 13) 比喩表現の修辞性が問題となるものが文の表現自体ではなく、「言語的な前後の文脈やその表現が発せられる言語外的な文脈が問題になる」比喩表現のことである。(山梨19、39-47頁)。

- 14) 「i.e. “食べる” という動詞は、“夢” のような抽象物を指す目的語とは通常は共起しない」(山梨18頁)。
- 15) Gourgues 673は、「死に装束 linceul」である可能性について批判的な若干の言及をしている。ちなみに、Albert Vanhoye, “La Fuite du Jeune Homme Nu (Mc 14, 51-52),” *Biblica* 52(1971): 404は、亜麻布 σινδών が、マルコ福音書では逃亡する若者の箇所(14:51-52)とイエスの埋葬の箇所(15:46)で二度ずつ、合計四回使用されていることの意義を強調している。
- 16) ウンベルト・エーコ『物語における読者』篠原資明訳、青土社、1993年、183頁。
- 17) Adela Yarbro Collins, *The Beginning of the Gospel: Probing of Mark in Context* (Minneapolis: Fortress, 1992) 135.
- 18) Lafcadio Hearn, “Yiki-Onna,” *KWAIDAN: Stories and Studies of Strange Things* (Boston: Houghton, Mifflin and Comp., 1904) 111-18.
- 19) ハリデイ、ハサン、87-92頁。
- 20) エーコ、186-89頁。
- 21) Allan K. Jenkins, “Young Man or Angel,” *Expository Times* 94(1983): 237-40は、我々が他の福音書を知らなかったら、この若者を「天使」と見なすかは疑問だと指摘する。
- 22) Hatton, Stephen B. “Mark’s Naked Disciple: The Semiotics and Comedy of Following.” *Neotestamentica* 35 (2001): 37-8. 他には Henry Freddermann, “The Fright of a Naked Young Man (Mark 14:51-52),” *Catholic Biblical Quarterly* 41:33(1979): 415が、50節との関連を検討し弟子の一人だと主張するが、残念ながら空の墓の若者との同一性を考慮していない。
- 23) Vincent Taylor, *The Gospel According to St. Mark* (London: Macmillan, 1957) 386-88.
- 24) ルドルフ・ブルトマン『ブルトマン著作集2: 共感福音書伝承史II』加山宏路訳、新教出版社、96-101頁。
- 25) Jenkins 238-239は若者の「白い衣」が苦難に忠実に尽くし永遠の命に復活させられるダニエル12:10にさかのぼる可能性があるとしている。
- 26) キリスト教最古の顕現伝承において、復活後のイエスの顕現が、弟子の一人である「ケファ」(ペトロ)に対してなされたと伝えられている(第一コリント15:5) ことと符合する。
- 27) Neil Q. Hamilton, “Resurrection Tradition and the Composition of Mark,” *Journal of Biblical Literature* 86(1965): 417-18.
- 28) Ulrich Luz, *Matthew 21-28: Hermeneia-A Critical and Historical Commentary on the Bible* (trans. James E. Crouch; Mineapolis: Fortress Press, 2005) 560-561, 565.
- 29) 荒井献『イエスとその時代』岩波新書、1974年、191頁。
- 30) ブルトマン、188-93頁。
- 31) 「彼ら」とはつまり、直前の「空の墓物語」における「十一人と他の人(24:9)」のうちの二人を指したものである。Joseph A. Fitzmyer, *The Gospel of According to Luke (X-XXIV)* (The Anchor Bible; New York: Doubleday & Comp., 1985) 1561を参照。

On the Mutual Omission of Mark 14:51-52 in Matthew and Luke

MIZOTA Satoshi

This article is intended as an investigation of the absence of the “fleeing youth” story (Mark 14:51-52) in Matthew and Luke. Based on “Markan priority” that the Gospel of Mark is the first Gospel, we are forced to think that both Matthew and Luke omitted Mk. (Mark) 14:51-52. Many scholars have come to accept this “mutual omission” by regarding this “fleeing youth” as the author Mark himself. However, some scholars question this theory. Meanwhile, since the 1950s, the relationship between the “fleeing youth” and the “youth in Jesus’ empty tomb” (16:1-8) in Mark has been discussed. However, this theory cannot explain the “mutual omission” unless we modify the traditional interpretation of Mark. Therefore, we notice in Knox (1951) that a linen cloth (“sindon”), which the youth left in 14:51-52, is used as Jesus’ burial outfit (Mk. 15:46). Basically, the “lexical cohesion” is not only the relationship between 14:51-52 and 15:46, but also between 14:51-52 and 16:5. When the other Gospels were not written, the readers of Mark regarded Jesus’ outfit as the death itself that the youth left to save his life. Then, insofar as we base our reasoning on Markan priority, we cannot find any basis for regarding the youth of Mk. 16:5 as an angel. Moreover, if the youth of 14:51-52 is recognized as the youth of 16:5, the youth of 16:5 should be equally a disciple as in 14:51-52. In return for Jesus’ death, the youth of Mk. 16:5 is a certain disciple who is resurrected from the death. Although Hamilton (1965) attempts to explain the empty tomb by the interpretation that people who rise from the dead are as angels that are in heaven in “the controversy with Sadducee” (Mk. 12:25), his opinion serves to explain the influence of the mutual omission of 14:51-52 in both Matthew and Luke. The author of Matthew added “the Saints’ Resurrection” (27-51-53) immediately after Jesus’ death. In Matthew, because both the “Saints’ Resurrection” incident and “empty tomb” story mention earthquakes, the two stories have lexical cohesion. Readers realize that the resurrection of the youth identified with a disciple in Mk.16:5 coincides with Jesus’ death. Moreover the author rewrote Mark’s “youth” in the empty tomb as “an angel of the Lord” (Matthew 28:2). The author of Luke rewrote Mark’s youth in the empty tomb as “two men” (24:4). In the “Emmaus” story (24:13-35), two disciples tell Jesus that the women recognized “two men” as “angels.” This fact leads readers to the recognition that the persons who rise from the death resemble “angels” through human eyes. In common, their alterations are premised on “the controversy with Sadducee” in each Gospel.